

特集

OTとは？ OTと輪！

～他職種と拡げる連携の輪～

皆さんは日々の業務の中で、利用者さまがいつも着ている「服」についてどう考えていますか？

「OT場面で動きやすければ、どんな服でもいいのでは？」、「機能と比べて服装は二の次」、「入院中と比べて、外来に変わってから服装が華やかになった」、「服の着方や清潔度でその方の認知面や精神状態を評価できる」…などなど、捉え方は様々だと思います。

また、利用者さまの更衣の自立度を高めるに、「ファスナーよりも面ファスナー（マジックテープ）の方が良い」「ファスナーの留め具が大きい方がいいけれど…」「もう少しアームホールが広ければ、ジャケットも着られるのに…」などと考えたことはあるけれど、どこへ行けば欲しいパーツが手に入るのか、どこで服を改修してもらえるのかという情報に乏しく、結局は評価のみでとどまっている、という場合もあるかと思えます。

特集記事の第4弾！今回は、洋服のリフォーム業界に務めた経験を生かし、障がいのある方の衣類に対する思いと企業の技術力とをつないでゆくために、新会社を設立した佃（つくだ）由紀子さんにお話を伺ってきました。

佃由紀子さんのプロフィールについて



佃さんは農学部卒業後、企業の研究職を経て、縁があって洋服のリフォーム業界へと飛び込みました。平成2年から株式会社ツクダ・クロス・

スタイル<http://www.e-tsukuda.com/>の運営に関わり平成21年からは代表取締役として千葉・埼玉県内直営5店舗の運営にあたってこられました。更に今年は障がいがあってもなくても楽しく生活できることをサポートするために、株式会社Peace21<http://www.peace21.co.jp/>を設立されました。ここでは新たに、ユニバーサルファッション&グッズの通販事業や、医療・リハビリ機関と連携しメンタルケアからリハビリ後の活躍の場までをサポートするトータルケア事業、そしてそれらに関わる人々の人材育成事業などに取り組んでいらっしゃいます。その他、NPO法人ユニバーサルファッション協会：UNIFA <http://www.unifa.jp/>の運営委員も務められており、NPO法人夢のみずうみ村主催の「夢のみずうみ楽会」へも第3回目（現在5回目まで開催）より参加し、服のリフォーム業の立場から講演されています。

Q 佃さんにとって「服」とは？

お化粧や服といったおしゃれは「外界」へのアクセツールだと思います。私達がTPOに応じて服を着分け、また服によって気分が左右されるように、リハビリを受けている方ももしかしたら、「パジャマ」の様な格好で外で歩く練習をするよりも、ポロシャツとチノパンやジーンズといった日常着で出られた方が、心もウキウキしてくるかもしれません。近頃は「寝巻き」「部屋着」「外出着」の定義が曖昧になってきて、人によっては「部屋着」のまま外出したり、寝たりしています。「洋服」が外部に示すそのメッセージ性によってその方のモチベーションや行動性が変化し、場合によっては訓練効果を高めると言うこともあるのではないのでしょうか？

また、自分自身が障がいをもってからの体でも着られる服のディテールを知っているということは、「自分に合う服を探しに行こう」という原動力にな

ります。見たいもの、探したいものがあるからこそ、街に出てゆけます。外出すれば五感で季節を感じることも出来るでしょう。洋服は、場を楽しみと意味を与え、気持ちの豊かさや行動範囲、人間関係を広げるアイテムとなります。

情報過多の現代社会では、「自分」から始める洋服との付き合いが少ない様に感じます。時に「既製品に身体を合わせる」こともいいことですが、「服を自分に近づける」ということも忘れないで欲しいです。

Q 働さんがOTに希望することは？

障がいをもった利用者さまが「自分はもうおしゃれなんて出来ない」という気持ちを払拭するような関わりを持ってもらいたいです。どんな人でも自分にあった洋服を選ぶ自由があります。

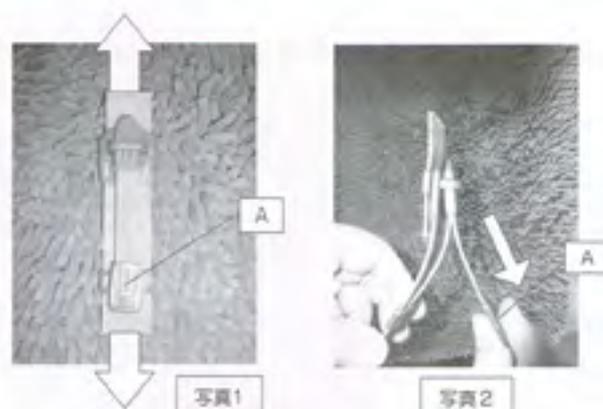
そのためにはOTさん達も衣服にもっと興味を持ってもらいたいです。利用者さまの運動機能面や認知面など評価した内容と、切り替えやタックの位置、スリーブの種類、ボタンやファスナーといった洋服の情報とを組み合わせることで、その方自身が着やすい洋服が分かりますし、着させやすくなります。自分で着るにせよ、着させてもらうにせよ、衣服とストレスなく楽しく向き合える環境づくりを利用者さまと一緒に探してもらいたいです。例えば、既製品を買う時やお直しを入れる時のチェックポイントなどを記載した「洋服のカルテ」の様なものがあるといいですね。

また、もし利用者さまの手持ちの情報が1つしかなければ、選択肢の幅を複数に広げてあげて欲しいです。新たに広がった部分に答えが見つかる場合もあるでしょうし、より多くの情報から利用者さまが自分にあったものを見つけることができれば、「私にもできるかもしれない」という心の切り替えにつながってゆくのではないのでしょうか。

Q どのような思いで新会社設立を設立されたのでしょうか？

21年間の服のリフォーム業との関わりの中で、個々の技術者はとても高い能力を持っており、企業も多くの便利商品を企画開発しているのにも関わらず、これらの情報が必要としているお客様に届いていないという現状を経験してきました。

例えばYKKの商品「クイックリリースバックル」(写真1)は、上下にいくら引っ張っても留め具は外れませんが、A部を軽く引くと簡単に外れる(写真2)、というものです。今は靴や特殊な衣服のポケットに付けられていますが、これを利用すれば、



つまむ力が弱くなった方や片麻痺の方々にとって、使いやすい商品が生まれるかもしれません。しかし、医療・福祉の現場と企業、そしてお客様が相互にコミュニケーションする場が少ないために、それぞれが「こんな物があれば便利なのに…」と思いつつ、そこで終わってしまいがちです。個々の思いをリンクさせることで、情報が循環し、幸せも循環するような社会をつくってゆきたいと思っています。また新会社ではネット通販事業に着手することで、こうした企業のお宝グッズを多くの人に発信し、より使いやすくしてゆきたいです。また、「こうしたいけど、実際どうしたらいいかわからない…」と沈黙してしまうことを極力減らし、疑問や質問に対処できる人材を育成してゆきたいと思っています。

Q 最後に、プロフェッショナルとして大切なことは？

お客さまの言葉は、「希望・願望の表現」です。本当はどうしたいのか、ご希望内容とファッション性と実用性はマッチしているのか、どこをどう直したらそれらを具現化できるのか。プロフェッショナルとは、相手を思いやるホスピタリティ精神を持つことで、言葉の裏にある本当の思いをしっかりと導きだし、「お客様に喜んで頂く」というゴールを目指すことだと考えています。

お話を伺っていると、働さんの衣類にかかわるお仕事は、まるで「住宅改修」の様に感じられました。洋服とはもともと外界から「身を守る」ためのものですが、今は自身のライフスタイルの象徴として、あるいは自己の表現手段としての意味合いが強いです。住居をその方や介護者が生活しやすいようにカスタマイズできるOTだからこそ、洋服に対しても、利用者さまの生活をより豊かにするために出来ることも多いのではないのでしょうか。

(文責 菊地)